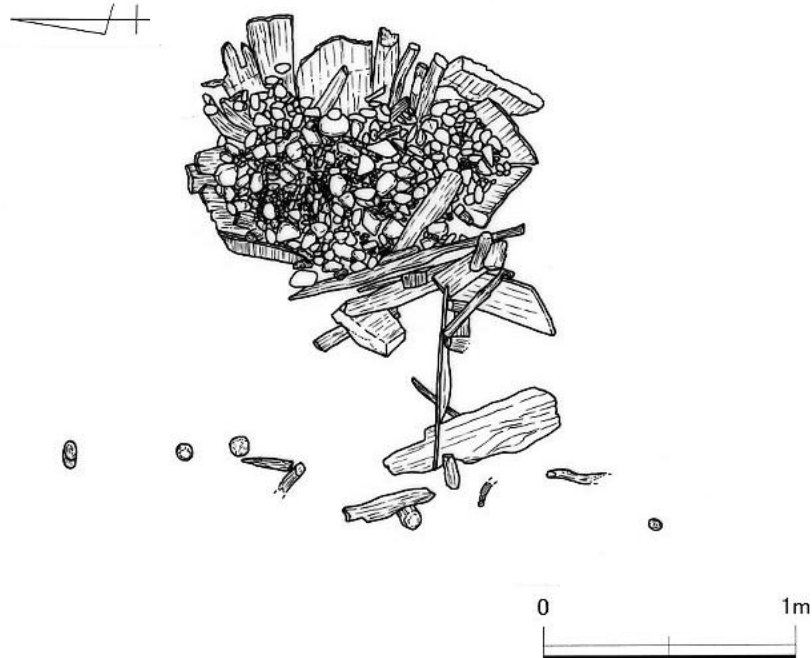


神奈川県埋蔵文化財センター 平成 27 年度第 1 回考古学講座  
平成 27 年 5 月 16 日(土) 10:00～

# 弥生時代の川辺の生活

～海老名市河原口坊中遺跡を中心に～

加藤久美（（公財）かながわ考古学財団）



## 1. 遺跡の立地と自然環境

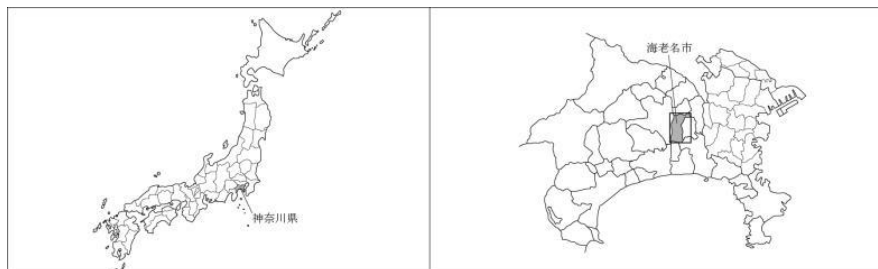
河原口坊中遺跡は海老名市河原口にあり、JR相模線・小田急小田原線厚木駅の北西約1kmに位置します。海老名市の西縁を南流する相模川の中流域にあたり、相模川・中津川・小鮎川の3河川が合流する地点の東側です。遺跡はこれら河川によって形成された自然堤防(沖積微高地)上に立地しており、現標高は21~22mです。

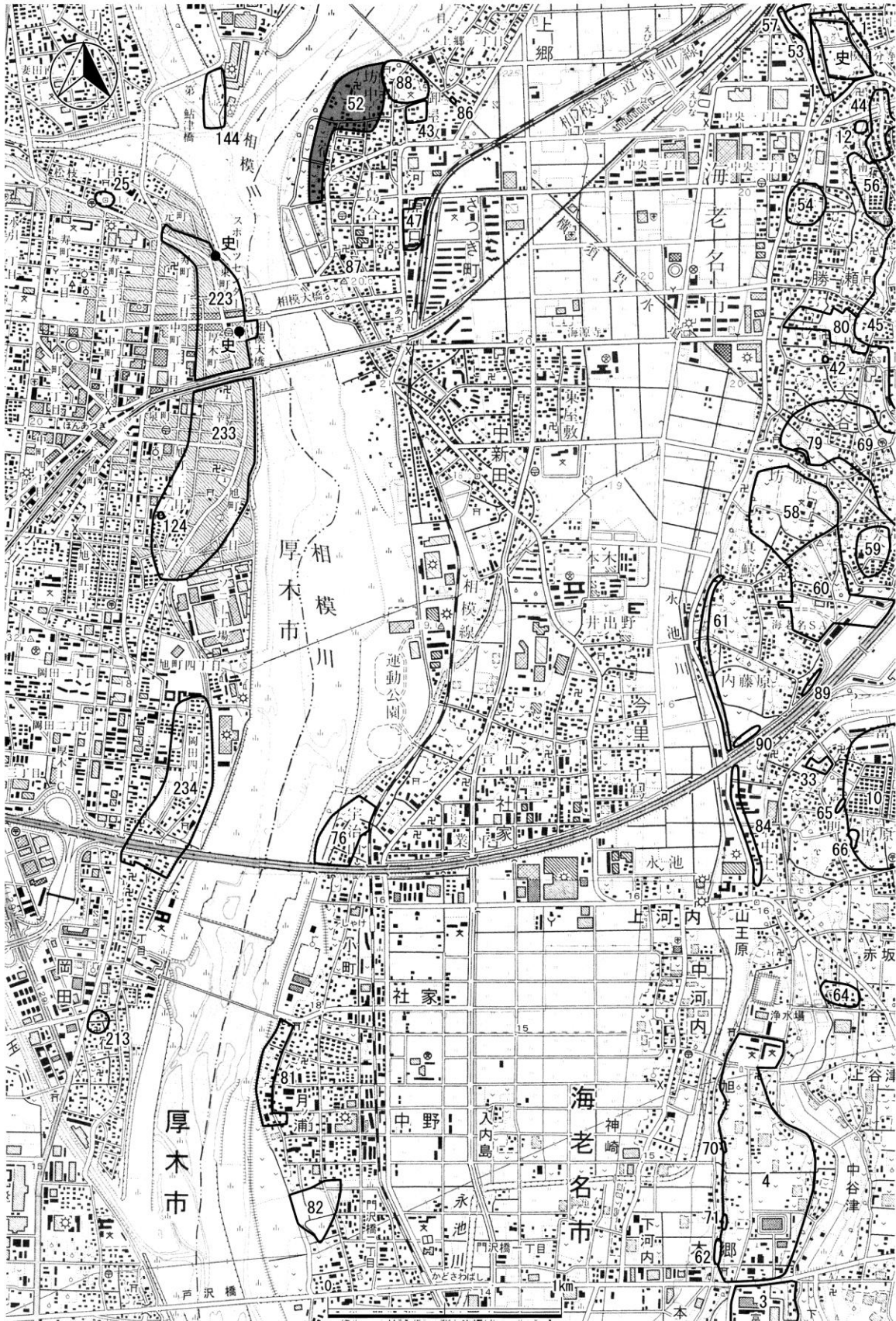
海老名市は相模川によって形成された丘陵・台地・低地が確認できます。各地形は南北に広がり、市域北部から中部には標高80~50mの座間丘陵、その西側には標高50~30mの相模野台地、市域の西側には標高30~15mの低地が広がっています。

市域が陸地化するの約30万年前といわれています。この頃、相模川が南流し、県央部に広範な扇状地を形成しました。20万年前あたりから、箱根火山・富士火山が活発になり、その火山灰や軽石が土壌化してローム層になりました。5万年前には、相模川が現在の流路を維持するようになり、火山灰堆積と浸食を繰り返し、河岸段丘が形成されました。最終氷期が約1万年前に終わると温暖化し、それまでに堆積した厚いローム層の上には富士黒色土火山灰が堆積します。この黒土の上に現在の畠、住宅や鉄道・道路などの整地層が広がっています。

低地の形成をみてみます。約2万年前に最寒冷期を迎え、海面低下に伴い相模川の流れが急となり、川底や相模野台地縁辺部が大きく削られます。その頃、相模川は現在よりも50~80mも低い位置を流れていたと考えられ、川と丘陵・台地で大渓谷を形成していました。その後、温暖化を迎え、上流から運ばれた堆積物でこの大渓谷は埋没し、沖積層が堆積するようになりました。約6,000年前の縄文海進最盛期には海面が現在より約3m高かったといえます。市内では海西中学校付近まで海水が入り込んでいたと考えられており、河口付近または河口近くの入り江のような場所であったと指摘されています。最盛期が過ぎ、海面が低下すると、沖積低地が形成され、縄文時代前期には本郷地区で早くも離水が進み、湿地や沼地に変化します。これに続いて、勝瀬地区で縄文時代後期、杉久保地区で弥生時代中期には湿地や沼地に変化していきます。しかし、市内の低地はその後も流水の影響をしばしば受け、湿地や沼地が安定するのは、古墳時代以降と考えられています。この湿地や沼地が安定した頃から、広く稲作が開始されたと考えられます。平安時代以降、後背湿地で条里制が施行され、耕地化がさらに進み、江戸時代には稲作のほかに、ソバ・ムギ類も栽培されるようになりました。遺跡の立地する自然堤防は縄文海退以後、低地が離水しました。このとき、粗く重い砂や礫は、比較的早く流路沿いに堆積するため、周囲よりやや高く、水はけの良い場所となりました。一方で、粘土や植物遺体など軽いものは、流路から離れた標高の低い場所に堆積し、後背湿地となりました。市域では相模川に沿って南北に自然堤防が形成され、その自然堤防と台地の間に広がる低い土地に後背湿地が広がっています。海老名市域で自然堤防上に立地している遺跡として、社家宇治山遺跡、中野桜野遺跡、跡堀遺跡などがあります。

自然堤防上は古くから集落地として選ばれ、現在でも住宅や畠が広がる場所となっています。







## 2. 河原口坊中遺跡の調査

河原口坊中遺跡は平成 18(2006)年 6 月にさがみ縦貫道路建設に伴う発掘調査が開始されたことが始まりです(第 1 次調査)。その年の 11 月に相模川河川改修事業に関連する調査が開始され、第 2 次調査、第 4～6 次調査として断続的に行われました。そして平成 26 年 1 月に第 6 次調査が終了しています。調査面積は第 1 次調査が 4,654 m<sup>2</sup>、第 2 次調査が 1,629 m<sup>2</sup>、第 3 次調査は下水道立杭設置工事のための 16 m<sup>2</sup>、第 4 次調査は 634 m<sup>2</sup>、第 5 次調査 120 m<sup>2</sup>、第 6 次調査 120 m<sup>2</sup>、合計 7173 m<sup>2</sup>です。調査区の位置関係は前頁の通りです。

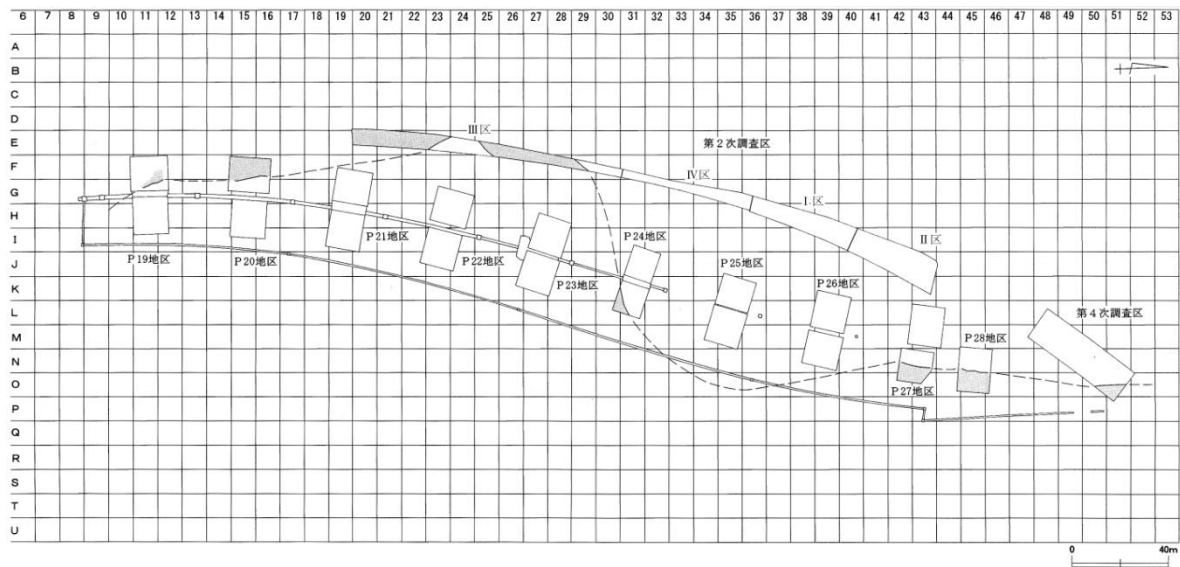
当遺跡では弥生時代中期～近代までの様々な遺構・遺物が発見されています。ここでは弥生時代から古墳時代前期までの時期に限って見ていきたいと思っています。

第 1 次調査では道路の橋脚部分 19 ヶ所と排水溝・排水マス部分の調査が行われ、弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居址 292 軒、方形周溝墓 13 基のほか旧河道が発見されています。弥生時代中期～古墳時代前期に限って主な遺構をあげると、第 2 次調査では竪穴住居址 148 軒、方形周溝墓 2 基と旧河道、第 4 次調査では竪穴住居址 93 軒、旧河道が検出されています。隣接する第 5・6 次調査で、弥生時代中期後半と推測される方形周溝墓 3 基が発見されましたが、住居址や旧河道は発見されていません。

竪穴住居址は、第 1・2・4 次調査でほぼ全域に重複する状態で、計 533 軒が調査されています。未調査部分への展開を考えても県内有数の大集落であると言って良いでしょう。方形周溝墓は第 1・2 次調査でも 1 基またがっているため 17 基ですが、調査区の全域に分布しています。竪穴住居址も方形周溝墓も大きくは弥生時代中期後半の宮ノ台式土器が出土する時期と、後期から古墳時代前期の時期があるようです。

旧河道は第 1・2・4 次調査で調査されています。主に大量の木製品が出土し、関連する遺構が調査された第 1・2 次調査を中心に見ていきたいと思えます。

第 1 次調査では P19・20、P24、P27・28 の 3 ヶ所で旧河道が確認されています。調査区は橋脚部分の掘削範囲のため 1 辺が 10～14m と狭く、更に 5 分勾配という 2 m 掘り下げると 1 m 狭くなる掘り方でした。そのため非常に狭い範囲での部分的な確認にとどまっています。河道の上流側から見ていきましょう。



P28 地区では調査区の中央から東側へ下る斜面として旧河道が検出されました。調査区の東側は奈良・平安時代までは旧河道の痕跡が残っていたようですが、河道の機能は失われていたと推測しています。中世にはその痕跡も失われていたようです。標高 20.6m 付近で調査区の中央に、縄文時代の代表的な石器である石棒が多数の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器とともに出土しました。掘り進めると河道の斜面に沿って完形の壺や甕が数多く出土しました。おそらく川岸で何らかの祭祀を行っていたのでしょう。調査区東端、標高 17.0m 前後で自然木に混じって宮ノ台式土器とともに木製品が出土しています。一木造りの高坏や火鑽臼、又鍬や斧台、農具の未製品や原材が出土しました。旧河道は P27 地区まで続いているのですが、その南側の P26・25 地区では発見されませんでした。調査区の東側を流れていると推測しています。

P24 地区では古墳時代前期の旧河道と弥生時代中期後半の流路が発見されました。旧河道は調査区の南東コーナーに、三角形の範囲(約 40 m<sup>2</sup>)で検出されています。遺跡の東側を北から南へ向かって流れていた河道が P24 地区南東コーナーにかかる位置で西へ蛇行しており、南側の P23 地区との間を流れて、第 2 次調査区側で蛇行しながら再び南下しているようです。南東へ下る斜面で最下面の標高は 16.4m ですが、河道の最深部には到達していないようです。木製品は多くの自然木に混入する状態で出土しています。鍬や機織りの緯打具、腰掛けの脚のほか、非常に繊細な作りの小型カゴが出土しています。供伴する土器から古墳時代前期の河道であると推定しています。ここでいう流路は、樹枝状に分かれて浅く流れた痕跡を指しています。5 条検出し、宮ノ台式土器を出土することから中期後半と推定していますが、多少の前後があったようです。流れの向きは北東から南西で、旧河道と一致しています。この時期の河道本体は古墳時代前期の旧河道に削られてしまったか、P23 地区との間に存在しているのでしょうか。

P19・20 地区で検出された旧河道も、西側へ下る緩やかな斜面で杭列や木製品が出土しています。P20 地区では弥生時代後期の杭列を伴う水溜状遺構が発見されています。板材と杭を使って舟形に囲い、底面に 2～6 cm の川原石を敷き詰めています。底面での規模は長さが 1.16m、幅は 0.6m です。杭列は水溜状遺構の西側(河道内側)を南北方向に 20～45cm 間隔で 8 本打ち込まれています。水溜状遺構と杭列の間をつなぐように直行して、約 70cm の板材が杭でたてられています。旧河道は P21 地区の西側で肩の部分が確認されており、P19 地区に続いているのですが、P19 地区で近世の洪水によって南西側が削られていました。

次に第 2 次調査Ⅲ区で検出された旧河道と関連の遺構について見てみます。1 号旧河道と 2 号旧河道は方向が大きく違っていますが、蛇行した同一河道と考えられています。P23 と P24 地区の間を通る河道が西進して 1 号旧河道と繋がっているのでしょうか。北東から南西に調査区を斜めに抜けています。調査区外の西側で蛇行して、約 11m 南に離れて 2 号旧河道として再び調査区域内に現れます。北西から南へ抜けて P21 地区をかすめ、P20・P19 地区へと南流します。堆積層は上層(弥生時代後期後半から古墳時代初頭)・中層(弥生時代後期)・下層(弥生時代中期後半)の 3 層に大別され、堆積層中に杭列やしがらみ状遺構が構築されていました。1～11 号に分けて報告されているしがらみ状遺構は 1 号・8 号・10 号・11 号しがらみ状遺構全体で北西側に開口部を持つヤナのような漁労施設を構成していると考えられています。木製品は中層と下層を中心に出土しました。鍬・鋤・エブリ・臼や堅杵、田下駄などの農具や、柱や台輪、梁・梯子などの建築部材、高坏や皿・槽、曲げ物などの容器類、



紡錘車や緯打具、布巻具などの紡織具、櫛状木製品やたも網などの漁労具、その他祭祀具や腰掛け、案、刀の鞘、斧柄などが、製品・未製品・原材含め多数出土しています。編組製品も繊細な作りのカゴから大型の網代までバラエティーに富んでいます。ト骨や鹿角製品、オオカミの骨などが出土したことは注目されます。また、弥生時代後期終末から古墳時代前期の流路が2条と板組遺構が発見されています。

### 3. 河原口坊中遺跡の調査で実施した自然科学分析の成果（水辺の生活を支えた環境）

低湿地の遺跡であるため台地状の遺跡では残存しにくい、分解されて跡形も無くなってしまふような木製品が大量に出土したことがわかりいただけたと思います。ちょうど真空パックされたように土中にある大量の水分で酸素の供給が阻害されたことが、残存した大きな原因と考えられます。その好条件でなければ残存していなかった木製品以外の資料も含め、河原口坊中遺跡周辺の環境を考えるための分析を実施しています。以下に紹介します。

#### ・ 樹種同定

1次調査：針葉樹9分類、広葉樹64分類、周辺に明るい広葉樹林が成立

2次調査：針葉樹9分類、広葉樹67分類、照葉樹林と冷温帯落葉広葉樹林という森林帯の多様な樹種が利用されていた。

#### ・ 大型植物遺体

カヤ種子、ヒノキ葉、スギ葉・種子・救果、モミ葉、オニグルミ核、ヤナギ属葉、サワシバ果実、イヌシデ果実、アサダ果実、シラカシ葉・果実、ウラジロガシ葉、コナラ属果実・幼果、ムクノキ核、エノキ属葉・果実・核、コウゾ属核、クワ属核、コブシ種子、アオツヅラフジ種子、マタタビ属種子、モモ核、ウメ核、サクラ節核、バラ属A・B・C核、キイチゴ属核、フジ属芽、センダン核、トチノキ果実・種子、ツタ種子、ブドウ属種子、タラノキ核、ウコギ属核、クサギ種子、ニワトコ種子、オオカメノキ核、サンショウ種子、イタヤカエデ果実・種子、イイギリ種子、エゴノキ属核、キリ種子の木本植物37分類、草本植物54分類群、シダ植物1分類。

P24地区：水洗資料に栽培植物のメロン仲間とイネ、アワが得られた。道端や荒地に生育するイヌタデ、カタバミ属、カナムグラ、湿地や道端に生育するハコベ属が生育する開けた空間、林縁にはヤマゴボウやワラビが自生。湿地や水田雑草のヒルムシロ属やヘエラオモダカ、ホタルイ属も産出しており、水田が存在していた可能性あり。

第2次調査Ⅲ区：食用可能な種であるカヤ、ツクバネガシ、イヌザンショウ、サンショウ、トチノキ、オニグルミ、栽培植物はイネ、キビ、ヒエ、アサ、ヒョウタン仲間、モモ、カボチャが得られた。粃殻と水田雑草を伴う点から、ごく近くに水田が形成されていた(弥生後期)と考えられる。

#### ・ 昆虫化石

アカガネサルハムシ = ノブドウやエビズルなどのブドウ属

タマムシ = エノキ

スジコガネ = アカマツ・ヒノキほかの針葉樹

地表性昆虫、食植生昆虫が大半で、食糞性昆虫は少ない。ヒメコガネ、マメコガネ、ドウガネブイブイといった畑作指標昆虫が旧河道から発見されているが、水田指標昆虫を欠く。

食植生の水生昆虫のガムシ、コガムシ、クロゲンゴロウ、オオミズスマシの産出は水流が

停滞し、水中に水生植物繁茂していたことを示す。

河原口坊中遺跡周辺では森林伐採が進められ、人家周辺には畑作物が栽培されていた。後背地の山々はアカマツと落葉広葉樹が混交する針広混交林の様相。食糞性昆虫の出現率が少なく、水域の水質汚染は極めて軽微であり、人間生活に関わる環境汚染はあまり進行していなかった。

・動物遺存体の調査

魚類：カツオ、マグロまたはカツオ類、タイ科、メジロザメ科、アオザメ属、アユ？、コイ科

獣骨：イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、ツキノワグマ、ニホンオオカミ、イヌ

両生類：カエル

鳥類：コガモ、ミズナギドリ科？

・花粉分析

P28 地区：クルミ族、アカガシ亜属、イチイ科、イヌガヤ科、ヒノキ科、スギが生育。イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ科も

Ⅲ区1号旧河道：後期後半エノキ属-ムクノキ属主体の河畔林でクワ科の植物も多く生育。周辺にアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が分布。イネ科花粉8%と多くないが水田雑草を含む。

・プラントオパール・植物珪酸体分析（イネ科植生の検討）

P24 地区：古墳時代前期ではササ類、ヨシ属、キビ族が検出され、イネ類は少ない。

P28 地区：メダケ属ネザサ節などの竹笹類、ススキ属、チガヤ属、ヨシ属が生育。

第2次調査Ⅲ区：弥生時代後期前半にはイネが存在していた。

・珪藻

P28 地区：好止水性種・流水不定性種・好流水性種・陸生珪藻も伴う。

・寄生虫卵

鞭虫卵・回虫卵が旧河道より検出。水田堆肥が何らかの理由で流れ込んだ？

・炭素・窒素安定同位体分析

土器内面付着炭化物：アワ・キビ・ヒエに由来する(弥生中期の糞)

古人骨：骨組織由来コラーゲンが保存されていないため測定不能。

・レプリカ方による土器の種実圧痕の同定

ウメ？、ノブドウ、アサ、キビ、アワ、コナラ属、イネ（粳、玄米、ごはん型）、昆虫

#### 4. 河原口坊中遺跡での生活

第1・2次調査では紹介した分析の他に、銅製品の鉛同位体比分析やガラス製品の蛍光X線分析、赤色顔料の鑑定、石材鑑定、黒曜石の産地同定なども行っていますが、周辺環境を推定する資料では無いので今回は省略しています。

調査の成果と自然科学分析で復元された周辺の環境から、河原口坊中遺跡で生活していた人々の暮らしについてみましょう。

・水辺は湿地や荒地の草が生え、水田雑草もある明るく開けた土地で、周辺には広葉樹林がある。

・水田が形成されていた可能性が高い。（粳、玄米、ごはんがあった。）



- ・畑が広がっておりキビ・ヒエ・アワ、ヒョウタンなどが栽培され、自生するワラビやヤマゴボウ、クルミなどを食べていた。
- ・ヤナ漁を行ってアユを捕っているほか、海の魚も食べていた。
- ・イノシシ・シカ・タヌキ・鳥・カエルなど食べていた。
- ・木でたくさんの道具や器を作り、使っていた。
- ・近くに大型の倉庫や高床の建物が建っていた可能性が高い。
- ・銅製の指輪やガラス小玉、サメの歯のペンダントでおしゃれをしていた。
- ・小銅鐸やト骨を使った祭祀があった。

今回、土器や石器の話はほとんどしませんでした。河原口坊中遺跡周辺では田畑を耕し、米や作物を食べ、獣を獲り、魚を捕り、他の地域とも交流・交換し、様々なものを利用して、豊かな生活を送っていたことが自然科学分析からも判明しました。

#### 参考文献

- 飯塚美保・加藤久美ほか 2014『河原口坊中遺跡 第1次調査』かながわ考古学財団調査報告 304
- 池田治・宮井香ほか 2015『河原口坊中遺跡 第2次調査』かながわ考古学財団調査報告 307
- 千田利明 2010『河原口坊中遺跡第3次調査』有限会社 ブラフマン
- 阿部友寿・高橋香ほか 2014『河原口坊中遺跡 第4次調査』かながわ考古学財団調査報告 300
- 渡辺清史・脇本博泰ほか 2013『河原口坊中遺跡第5次調査』国際文化財株式会社
- 市川正史・渡辺務ほか 2014『河原口坊中遺跡第6次調査』株式会社アーク・フィールドワークシステム